

迷犬タロの物語

「タロ」とは、私の家で飼っていた犬の名前です。私は反対していたのですが息子が同級生から雑種の子犬を譲り受けてきました。その時は小型犬かと思っていましたが、二本足で立つと1m40cmくらいまで大きくなりました。2年後息子は大学生・社会人となり家を離れたため、結局私が世話をすることになりました。タロは、無芸大食で馬車馬並みの馬鹿力があり、散歩の時は私をずっと引きずっていました。日中は時間がとれず朝の四時とか帰宅後夜七時から散歩していました。冬は氷点下の夜道を散歩するので辛かったです。内弁慶で臆病者のタロは誰が来ても一度も吠えたことはありません。しかし、餌や散歩をねだるときには、ご主人様の私を吠えます。番犬としては全然役に立たない犬でした。タロの一番の楽しみは散歩です。私が散歩用のリードを準備すると、喜びの余り興奮状態に陥りジャンプしまくり狂喜乱舞を約30秒間続けます。「お座り」と言っても言うことを聞きません。また、リードや首輪が切れて何度も脱走・放浪し家族に心配をかけたこともありました。知能にかなりの問題があるタロでした。しかし、だんご鼻ととぼけた目に愛嬌があり憎めません。娘は大学に合格した時、タロと抱き合っ喜びを分かち合っていました。子供達は心配事や悩みがある時は、タロと散歩しながら心を癒していました。

家族に可愛がられ、その一員として暮らして8年の月日が流れました。そして3月11日東日本大震災が発生しました。学校から帰宅しタロの犬小屋を確認しました。蔵の土壁の下敷きになり影も形もありませんでした。もしかして生き埋めになったのかなと思いました。しかし、運良く土壁が崩れなかった僅かなスペースに身動きがとれず生き残っていました。喜びもつかの間、翌朝の午前7時に原発事故による避難命令が出されました。タロを池の近くにリードを繋ぎ直し、ありったけの餌を目の前に置いて、「タロすぐに戻るから頑張れよ」といってタロを残して家族全員で避難しました。後から分かったことですが、避難直後の八時前後に大量の放射線が我が家にも降り注ぎました。当然、餌や池にも降り注そぎそれを飲み食いしたタロは、大量に外部・内部被曝をしてしまいました。

その後一ヶ月間、私たち家族は親戚の家を転々として避難生活を送っていました。そして、仕事再開のため千葉県から二本松市の妻の実家に戻りお世話になることにしました。仕事が始まる前にどうしても浪江町に残してきた車や生活物資が必要となり、一時帰宅することにしました。その時は線量計や防護服はなく、大量被曝する危険性を考えると本当に恐怖でした。今思えば4月当時の浪江町の我が家の空間線量は約40μシーベルト前後あったろうかと推測しています。無謀な帰宅でした。帰宅前日タロはもう死んでいるだろうから餌は必要ないと考えていました。でも子供達は「きっと生きているからお父さん必ず餌持ってタロにあげて！」と訴えてきました。翌日浪江の家に着くと何とタロは元気に



生きていました。久しぶりの対面に尻尾を振って大喜びでした。一ヶ月間以上もリードに繋がれたままでしたのでリードを外してやりました。「やった！！自由の身になれたぞ！」と言わんばかりに喜んでどこかに吹っ飛んでいってしまい、その日は戻ってきませんでした。二回目の一時帰宅の時でした。帰宅しているとタロはどこからともなく現れました。今回は置き去りにした妻の

車（半年後に被曝している車から妻も私も被曝したことが判明）も持ち帰ることにしていました。妻と私の二台の乗用車に荷物を積み終え、「タロまた来るから頑張るんだぞ」と餌を与えていました。すると知らない野良犬が来て餌を食べ始めました。「バカおまえじゃない。タロだ!」と言って追い払いました。その時タロは餌には見向きもせず、私の足下に身をすり寄せてグルグル回りながら絡みついてきました。最初は何をやっているのか分かりませんでした。しかし、タロの仕草を理解した瞬間にタロを連れて帰らないことへ対するものすごい罪悪感が私を襲いました。「誰も帰って来ない寒く明かりもつかない家の庭で、毎日毎日家族の帰りを待っていたんだ。餌なんかには騙されないぞ。今度はオレも一緒に連れて帰ってくれ!」という意志表示だったのです。その頃は放射線に汚染されたタロを避難先で飼うことができるか分からず連れて帰ることができませんでした。「タロごめん! まだ連れて帰れないんだ」と言い聞かせていましたが、先に出発した妻の車を追い始めました。しかし道路が直線になり、次第にスピードアップされた妻の車からどんどん離されていきました。そして、必死に走るタロを横目に私の車にも追い抜かれていきました。3kmくらい追いかけて来たでしょうか。ルームミラーに写る走るタロの姿がしだいに小さくなり、点になってしまいました。それでも諦めないで追いかけて来るタロを見ながら運転していました。余りにも必死なのでもう可哀想で見えられなくなりました。タロお願いだから追いかけて来るのを止めてくれと願っていました。胸が締め付けられる思いでした。本能的な欲求だけに従って行動するものと思っていたタロが、これほど人間の愛情を求めていたことを初めて知らされました。しかし、非情にも私はタロの思いを断ち切るかのように車のスピードを上げていきました。

二日後、三回目の一時帰宅の時は、タロの姿はどこにも見つかりませんでした。警戒区域設定後のタロの安否は不明となり約二ヶ月が経ちました。生きていいのか死んでしまったのか、ルームミラーに写るタロの光景だけは頭から離れませんでした。ある日、浪江町に住んでいた近所の人からタロは埼玉県のある動物保護団体に保護されていると教えられました。それを聞き今度こそタロと一緒に暮らそうと思い息子が保護団体に迎えに行きました。タロはオリの中から息子を見つけると大喜びでした。ストレスのため少し弱っていましたが、二本松市に戻り次第に元気を取り戻していきました。郡山市に引っ越しても毎日私と元気に散歩していました。私が退職しても、しばらくは一緒に散歩できそうだなと思っていました。しかし、一月のある日突然食欲がなくなり、一番の楽しみの散歩に連れて行っても私が引っ張らないと歩こうとしませんでした。すっかり元気がなくなり好物の肉も何も食べなくなりました。そして1月18日雪の降る朝、何故か小屋から出て雪の上で冷たくなっていました。家族にとって悲しい一日となってしまいました。家族全員で火葬場に行き焼香し最後の別れをしました。その時火葬場の係の人から、タロは火葬の痕跡から病死の可能性があると言われました。もしかして、あの時の大量被曝が原因ではなからうかと考えましたが、本当の死因は分かりません。12年間家族の一員として可愛がられ、多くの思い出を残してくれました。原発事故のため餓死したり飼い主に戻れなくなったり、不幸なペットが沢山いる中でタロはどちらかと言えば幸せな犬であったのではないかと思います。3月の彼岸に一時帰宅します。その時にタロが生まれ育ち家族と一緒に過ごした故郷に骨を埋葬してきます。

松本佳充

